



第2章 [実施報告]

2-1 事前研修

第1回 6月15日（土） 10:00-12:30 @JICA沖縄センター

目 的

- ①研修の概要、ゴールを理解する。
- ②派遣国および海外研修について知り、事前準備の目途を付ける。
- ③参加する教員同士のコミュニケーションが円滑に図れるようにする。

ゲームの要素を取り入れた自己紹介では、お互いが笑顔になることが増えていきました。シートを裏返すアクティビティの振り返りでは、①チームとしての点数、②個人のチームへの貢献度を点数化し共有しました。①は全員が100点満点。初対面同士でとても緊張していましたが、点数の説明を共有しながらみんなで達成感を感じたり、同じ気持ちでいる経験は安心感を生み出すのだと実感しました。ルールも簡単、準備するものは大きめのシート1枚とすぐにもできそうなこの活動を私の学級でやったらどうなるかと思いながら、子どもたちの笑顔が思い浮びました。

開発教育ワークショップ「ウムヨム村のブタの一生」では、ある村の写真を見ながら、自分の考えや意見を自由に話していく活動を行いました。様々な意見や考えを交換しながら特に印象に残ったのは、豚が丸焼きにされている写真を見た田中さん（JICA職員）の「この豚が食用で焼かれているとするなら、村人に大切に食べられているだろう。全てのブタがそうでありますように。」というコメントでした。「かわいそう。」「何の儀式かな。」程度のコメントをもつ私には全くない視点だったので、とてもすごいなと感じたのと同時に、私もこれからの経験で、広くて深い視点を持てるようになりたいと感じた瞬間でした。（所感：仲松）



第2回 7月13日（土） 10:00-16:00 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト

NPO法人沖縄NGOセンター 奥山有希氏
NPO法人沖縄NGOセンター理事 島袋美由紀氏
琉球大学 理学部自然海洋自然科学科 土岐知弘准教授
豊見城市立豊見城中学校 大城真紀子教諭

目 的

- ①開発教育についての基礎理解。指導者自身がおもしろさを知る。
- ②多様なワークショップの手法を知るとともに、それぞれの効果や受講者の気持ちを体験する。
- ③自分ならどうアレンジして教材を使用するかという視点を得る。
- ④県内の実践者の取組から、学級経営や時間割調整の知恵を学ぶ。

Program 1

内容

担当

【講義＆ワークショップ】
・開発教育の成り立ち
・参加型学習の意義

奥山有希氏

本研修は開発教育指導者養成講座の第1回と兼ねており、私達教師海外研修の参加者とあわせて沖縄県のような地域からの小学校から高校、一般の方との開発教育の特徴や基礎について学ぶきっかけになりました。その中で、参加型でわかりやすく援助のあり方や国際協力を考えるワークショップ「参加のはしご」について学びました。「参加のはしご」では、市民活動の参加の在り方をはしごに例え、援助する前に支援がどうあるべきかという視点をワークショップを通して持つことができました。例としてそれぞれの校種の児童生徒会活動の在り方を第1段階から子ども達が主体となっている第8段階にあてはめてワークを行うことで普段何気なく行っている“活動”について客観的に捉え、児童生徒会活動に限らず、ただ学ぶ、教えるではなく、主体的に参加することの本来の意図やねらいについて改めて気づくことができました。（所感：小橋川）



Program 2	内容	担当
	【ワークショップ体験①】 水の環ボードゲーム「すいまーる」	島袋美由紀氏 土岐知弘氏

「すいまーる」とは、南の島特有の水循環について理解した後、水をめぐる諸問題への意識を高め、あらゆる世代や立場の人々が「持続可能な島の暮らし」を一緒に考えるために開発されたコミュニケーションツールです。ボードゲームから考える手法は初めてでしたが、実際にある島をモデルにしたという点でも身近なところからSDGsを考えるという視点でも、とても印象的でした。（所感：小橋川）



Program 3	内容	担当
	【ワークショップ体験②】 「バッグの持ち主を探せ！」	大城真紀子氏

昨年度の教師海外研修参加者である大城真紀子先生（豊見城市立豊見城中学校）によるワークショップ体験と事例報告がありました。真紀子先生は、「平和」について捉えていく中で、様々な視点から「多様性」（互い）を捉えることで自分らしく生きられる社会の実現を目指せるのではないかと考え、海外研修で得た学びを、さらに深く広げ「多様性を認め合う社会の実現に向けて」という中学2年の総合の時間の単元をパッケージ化したそうです。ワークショップでは、ある何名かのバッグの中身から想像できる人物像を当てはめていくというものでした。一見すると簡単そうですが、これがなかなか難しくグループ内では「ピンクの持ち物があるから女の子かも」「パソコンや電子機器が多いから学生かな？社会人かな」といった意見が交わされました。このワークのねらいが、自分の中にあるアンコンシャス・バイアス（無意識の偏った見方）に気づき、多様性を認め合うために、自分のバイアスとどのように向き合うかを考えさせるというもので、私達参加者も実際に自分の中にあるバイアスに、はっとさせられる場面が多く、今までにない気づきがありました。



今回の研修では、開発教育の基礎から、身近な題材を活用したワーク、また学校教育で開発教育や国際理解教育を通常のカリキュラムにどのように工夫して取り入れるかといった、これからの教材作成の土台となる学びが多くありました。（所感：小橋川）

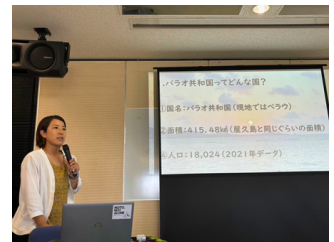
第3回 1日目 7月20日(土) 10:00-16:00 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト	うるま市立宮森小学校 棚原美緒教諭 沖縄県立北中城高等学校 川平由香子教諭 那覇市立仲井真小学校 松本美貴教諭 NPO法人沖縄NGOセンター 奥山有希氏
目的	①授業に取り入れやすいフォトランゲージの手法を知り実践する。 ②多様なワークショップの手法を知るとともに、それぞれの効果や受講者の気持ちを体験する。 ③自分ならどうアレンジして教材を使用するかという視点を得る。 ④10分ワークショップを体験し、3回目以降のワークショップづくりにつなげる。

Program 1	内容	担当
	【ワークショップ体験①】 「パラオ共和国ってどんな国？」	棚原美緒氏

昨年教師海外研修に参加されたうるま市立宮森小学校教諭、棚原美緒さんのフォトランゲージのワークショップを行いました。このワークショップ後、宮森小学校の児童たちは地域課題を探し、ゴミ拾いという課題解決へと向かう行動にまでつながったというお話を聞きました。児童のこの行動は、棚原先生がパラオに興味関心を持ってもらうために、パラオクイズでの導入、フォトランゲージでの深掘りなど段階を踏んだ活動を展開する事によって、児童が自分事として捉える事が出来たから起きたのだと感じました。達成したいねらいからぶれないように、パラオ研修を活用していきたいと思いました。

(所感：大城)



内容	担当
【ワークショップ体験②】 「難民問題に対して日本が取り組むべきこと」	川平由香子氏

沖縄県立北中城高校の川平由香子先生によるワークショップを体験しました。動画を中心に難民受け入れの実態について知り、難民問題に対して日本が取り組むべきことをバタフライチャートを使って考えました。8つの項目を自分の価値観で分け、それをグループの人と話し合いながら再度分けました。原因や現状を知り、どのような政策が望ましいか協働しながら多面的・多角的に考え、新たな価値観を見出すことの大切さに気づくことができました。

(所感：大城)



内容	担当
【10分ワークショップ体験】 「日本の食品ロスの現状を知ることを通して、持続可能な社会の在り方について考える。」	松本美貴氏

松本美貴先生による10分ワークショップを行いました。はじめのスライドには「523万トン」とだけ大きくかかれており、目を引くスライドとなっていました。その後もスライドに少量の情報をのせ、考えを持たせ、10分で完結する流れとなっていました。私も、パラオでの研修では、いろんな人から話をきいたり、写真として記録に残していきたい。そして、1つの授業にすべてをつめこむのではなく、10分ワークというかたちで小分けにしながら子どもたちに伝えていきたいと思いました。（所感：大城）

第3回 2日目 7月21日（日） 10:00-12:30 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト	有限会社琉球環境マネジメントサービス 吉田透氏
目的	①沖縄の強みを活かした国際協力事例について知る。 ②授業づくりのヒントを得る。

琉球環境マネジメントサービスの吉田透さんから、①沖縄の水産業と島しょ国における水産業の多様化と資源管理、②JICA草の根事業であるパラオ北部沿岸漁業組合における回遊魚（カツオ・マグロ類）の漁獲技術向上と水産物販売を通じた組織強化についてお話をいただきました。

私の勤務する糸満市は、「漁業のまち」と呼ばれるほど漁業が盛んにもかかわらず、漁業について知らないことが多いことに気づかされました。

沖縄とパラオは、水産資源が似ていて、独特の資源管理の方法が必要であることや、パラオではこれまで、沖合での漁はほとんど行われておらず、その影響で沿岸水域での魚の生息数が年々減少することが課題であり、資源保全と漁業のバランスを図るために、パヤオ（人工魚礁）の設置と併せた沖合での漁業に取り組んでいるということがわかりました。また、ジャーキー（カツオ・マグロ・カジキ）の加工効率の向上と観光客向けの製品づくりを促進しており、鮮度保持への課題対応、観光業と連携していること等貴重なお話を聞くことができました。

吉田さんがパラオの人々と協力してプロジェクトを進めていく中で、達成感ややり甲斐を感じられる場面がある反面、現地の人々と信頼関係を築くことの難しさ、優秀な人材の不足、技術を伝えて人を育てることの大変さなどについて聞くことができ、「援助する」ことの難しさに気づくことができました。明日からのパラオ研修において、「援助する」ことに対してどのような新しい発見があるのか楽しみになりました。（所感：當銘）



2-2 海外研修スケジュール

※7/22と8/1は移動日

	日付	訪問先／内容	研修のねらい・ポイント
1	7/23 (火)	JICAパラオ事務所 ブリーフィング	パラオの課題やJICAパラオ事務所の取り組みおよびODAやNGOの支援について知る。
2	7/24 (水)	特定非営利活動法人 ピースウィンズ・ジャパン	国際NGOピースウィンズ・ジャパンのパラオにおける活動を聞き、島しょ地域ならではの医療の課題について知る。
		パラオ国立博物館	パラオの先史時代から他国による統治時代、そして現在に至る歴史を資料を通して知る。
3	7/25 (木)	ローカルマーケット	週に一回開かれるマーケットを視察し、現地の方の生活や食文化などについて知る。
		環境配慮型交通システム 整備プロジェクト	パラオにおける公共交通の実態とプロジェクトがいかに課題解決に取り組んでいるか知る。
4	7/26 (金)	バベルダオブ島廃棄物 処分場 JICA中部 草の根事業	JICA中部草の根事業の活動現場を視察し、島しょ地域が抱える廃棄物処理の課題や日本の技術を活かした支援について知る。
		コロール州廃棄物管理 事務所 JICA関西 草の根事業	JICA関西草の根事業の活動現場を視察し、島しょ地域におけるリサイクルの方法や、未活用資源を利用した商品開発を知る。
5	7/27 (土)	ペリリュー島	第二次世界大戦の戦跡を視察し、沖縄での地上戦との相違を知る。
6	7/28 (日)	ホームビジット	パラオの方と一日をともにし、現地の方の生活や習慣、価値観を知る。
		JICA海外協力隊との懇談会	パラオに派遣されているJICA海外協力隊と「平和教育」をテーマに、沖縄とパラオ、沖縄と日本本土それぞれの歴史や教育について意見交換を行う。
7	7/29 (月)	JICA海外協力隊 ジョブシャドウイング	パラオの学校でJICA海外協力隊の活動を視察し、パラオにおける学校教育や支援の現状を知る。子どもたちに授業を実施し、協力隊の模擬体験をする。
8	7/30 (火)	在パラオ日本国大使館	これまでの研修の報告と、日本国大使館の役割を理解する。
		パラオ国際サンゴ礁 センター (PICRC)	パラオにおけるサンゴおよび海洋環境保全の取り組みを知る。環境保全への理解促進のための観光事業（エコツアー）について体験を通して学ぶ。
9	7/31 (水)	パラオ高校	パラオにおける中等教育の現状を知る。 日本語を学ぶ高校生と交流する。
		日本地雷処理を支援する会 (JMAS)	海中に残置された爆雷の処理やコロール州政府レンジャーへの技術移転教育の現状を知る。

2 - 3 海外研修

DAY1 7月23日(火)

○JICAパラオ事務所

JICAパラオ事務所のブリーフィングでは、パラオでの実地研修を前に3名の職員からお話を聞くことができました。まず森さんからパラオ国の概要や抱えている課題、JICAが行っている取り組み等を、矢野さんから安全面について、最後にJICAパラオ事務所の青木所長からの総括的なお話を伺いました。日本のODAの中で、二国間の援助を行っている機関がJICAであるということを知りました。パラオにおける日本の協力概要としては、海上保安分野の能力向上や海洋環境の保全といった「持続可能な海洋の実現」、経済成長の基盤強化、保健医療サービスの向上、教育機能強化といった「社会基盤・産業育成基盤の強化、民間投資の支援及び人材育成」、「気候変動・環境問題・防災への対応」の3つの重点分野がありました。沖縄とパラオは同じ島国で地形も似ていることから、共通している課題があったり、沖縄が先行モデルとなっている分野もあったりと、相互に協力しながら活動していることがわかりました。日本の支援だけに目を向けるのではなく、他国からの支援や相互協力をしていくためにはどのようにしたらよいのかという視点でもしっかりと見ていきたいと思いました。充実した研修にするためには、沖縄にいるような安心感を覚えるパラオの土地でも、治安の面でもしっかりと気を抜くことなく、安全に気をつけながら過ごすことも大事だとわかりました。また、私達は教師という立場で本研修に参加していることから、気づきを教育現場にどのように繋げていくか常にアンテナを張り、様々なことを学び感じとりながら過ごしていきたいと思いました。(所感：島津)



DAY2 7月24日(水)

○ピースウィンズ・ジャパン

ピースウィンズ・ジャパンは「誰一人取り残さない」をビジョンに27年の歴史がある組織です。大洋州全体の支援を想定してパラオでは2021年から活動しています。研修では、まず現在のパラオの課題を学ぶことが出来ました。パラオでは教育の機会が制限されているため、若い世代が国外に流出しています。さらに出生率が1.0%を切っているにも関わらず、人口減少に対する取り組みがなされていないのが現状です。

今回の研修で最も印象に残ったのが「援助慣れ」というキーワードです。パラオは地政学的に好条件に位置していることから、日本、アメリカ、台湾など多くの国・地域から援助を受けています。援助を行う際は、物資を扱える人材がいるのか、修理に対応出来るのか事前に検討するだけではなく、支援物資がどう扱われているか確認することも大切です。パラオでは、支援を受け続けている現状を受け入れている人も多く、援助慣れしている環境を変えることが困難になっています。私は国際協力のゴールは「支援を必要としない国づくり」だと捉えていたので、パラオの現状を聞き、自分の考え、価値観に戸惑いが生まれました。国際協力を行う際には、支援する側、される側がそれぞれ目指している将来像をしっかりと確認しあうことが大切だと思いました。

(所感：平田)



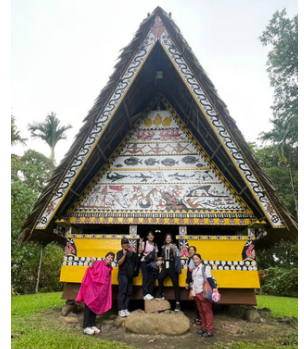
○パラオ国立博物館

パラオ国立博物館では、パラオの起源や自然、歴史について学ぶことができました。館内は、スペイン・ドイツ・日本に統治されていた当時の様子が時系列で展示されており、パラオの人々の暮らしの移り変わりや、他国の統治がパラオ人の生活にもたらした影響などについて知ることができました。

日本統治時代には、土地の調査や教育の普及が進み、パラオの経済発展に日本が大きく関係していたことがわかりました。特に、「ホンカ」と呼ばれる義務教育制度が整備され、1931年にはミクロネシアエリアでは最も高い93%の就学率があったということに驚きました。パラオが親日国だと言われる理由に納得しましたが、展示の後半部分には第二次世界大戦における日本軍による被害についての証言が展示されており、心が痛くなりました。沖縄の平和教育では、他国にもたらした戦争の影響について考える機会は少ないが、他国の視点から戦争を考え、平和について考える機会も必要だと感じました。

また、BAI（バイ）と呼ばれる村の大切な物事を決めるために使われていた集会所も見学することができました。バイの側面には口頭伝承を視覚的に表現した絵が描かれており、それをスケッチして、1枚の板に彫刻する「イタボリ」も館内やお土産品店で見ることができました。BAIに女性の出入りは認められておらず、集落のリーダーは男性だが、そのリーダーは女性による投票により選出されるという点が印象に残りました。また、パラオには伝統的な母系制度があり、個人の集団帰属が女性先祖から祖母、母、娘を辿って決められ、土地や財産を共有するシステムがあるということがわかりました。パラオの社会における女性の地位にとっても興味深いものを感じると同時に、現在のパラオではジェンダーによる分業や固定観念が存在するののかも気になりました。

（所感：當銘）



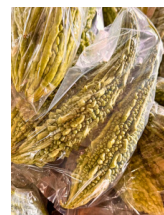
DAY3 7月25日（木）

○ローカルマーケット

週に一度開催されるローカルマーケット。規模は大きくはないが、現地の人が作った野菜や弁当（パラオでは、「ベントー」で通じる）、コーヒーなどが販売されていました。現地の方にとっては買い物ができるだけでなく、憩いの場にもなっている様子でした。

私たち一行に気がつくのと、マーケット内のみなさんが笑顔で「こんにちは」とあいさつなどしてくれて歓迎ムード一色でした。また、海外で見られるような観光客へ購入を強く促すような雰囲気は全くありませんでした。それどころか私たちが初めて見る料理だと知ると、「試してみて」と大きなカップいっぱいスープを注いでサービスしたり、「弁当買いに来たの？僕がおごるよ」と気前の良い方もいました。

マーケット視察からはパラオの人たちの朗らかで商売に貪欲ではないような気質がうかがえました。また売られていた野菜の中に、私たちにとてもなじみ深いゴーヤーやシークワサー（現地では「レモン」）がありましたが、どの野菜も小さく、1袋2本入っていたゴーヤーでも2人前にもならない大きさでした。滞在中、パラオで農業は厳しいと何度か耳にしましたが、マーケットの野菜からもそれを伺い知ることができました。（所感：仲松）



○環境配慮型交通システム整備プロジェクト

環境配慮型交通システム整備プロジェクトに携わる小田さん、大塚さん、井澤さんからお話を聞きました。パラオでは、過度な自動車利用により、環境や健康への影響などの様々な問題に直面しているそうです。実際に、現地で過ごすレンタカーやタクシーは見当たらず、高齢者も多い現状から、私自身もパラオの交通の不便さを感じていました。そこでプロジェクトでは、マスメディアと積極的に連携し、環境にやさしく新しい行動文化の醸成を目指し、公共交通の整備が進められています。実際にバスに試乗すると、道中バスを利用する方もおり、このプロジェクトは島民に認知はされていることがわかりました。また、ナイトマーケットの日には乗車できないほどの島民や観光客の利用があり、公共交通の必要性を改めて感じました。今後もさらに公共交通の整備が進み、島民や観光客に根付き、さらなるパラオの発展に繋がってほしいと思いました。（所感：大城）



DAY4 7月26日（金）

○アイメリーク州廃棄物処理場およびバベルダオブ島における分別排出システムの普及促進事業

「臭いがしない！」これが、私達がこの処理場についての第一印象でした。処理場は「臭い、汚い」等というイメージでしたが、ここは臭いもそれほどなく、整然としていました。パラオ研修では、宿泊先やショッピングモールで日本ほど分別表示がしてあるゴミ箱を見かけず「生ゴミはどうしているのだろう」「鉄やアルミなどのメタルはどのように処分してるのか」という、普段の生活で何気なく捨てている暮らしの中のゴミについて気になっていました。

パラオでは従来、各州ごとの廃棄物投棄場は覆土しないオープンダンプ方式で、衛生上や環境保全の側面からも十分な管理はされてなかったそうです。2021年2月にJICAの援助で、準好気性埋め立て方式である福岡方式を採用し、アイメリーク州廃棄物処理場の運用が開始され、25年間の使用を予定としているということです。しかし廃棄物が想定以上に増えてしまうと、処理場の運用期間が短くなってしまいます。その事態を防ぐため、本処理場を運営しているパラオ公共基盤・産業・商業省公共事業局（BPW）は、国際環境技術移転センター（ICETT）と協働し、JICA草の根技術協力事業「パラオ国バベルダオブ島における分別排出システムの普及促進事業」に取り組んでいます。BPWスタッフやICETTの丸山さんから事業説明を受けました。

活動概要としては、各地域へのゴミステーションの設置や小学校に分別排出ステーションを1つずつ設置し分別排出活動を実施、担当者に対して日本で研修を行い、指導能力の強化、3R+Rのコンポストなど、環境教育に関わる教材を作成し、子ども達への実践に活用しているそうです。事業を通して2026年1月までに、コミュニティ型の分別排出の仕組みづくりやバベルダオブ島全域の小学校での環境教育にも取り組み、分別排出システムの全島普及、そしてパラオ全体への普及のための土台づくりを推し進めていくとのことでした。

印象的だったのは、敷地内にあるスクラップされた鉄や金属、メタルの処理については外国の企業が入っているとのことでした。そこでまとめられたゴミをそのまま、海外輸送し処分され利活用されるということでした。パラオで見かけた車はほとんどが日本製でした。誇らしく感じた一方で、廃棄する場所が整っていない現状を考えると「つくる責任つかう責任」という言葉が浮かんできました。パラオに限らず日本、世界でゴミをゴミとせず、人にも環境にも優しいシステムができるといいなと思い、子ども達にもそのことを伝え、今自分にできることを一緒に考えていきたいです。

（所感：小橋川）



○コロール州廃棄物管理事務所

藤勝雄さんより、リサイクルセンターの取り組みやJICA草の根技術協力事業である廃ガラスを活用したガラス工房事業について説明を受けました。藤さんは、2004年からJICAシニア海外協力隊としてパラオに派遣され、活動が高く評価され、活動終了後はコロール州政府に雇用されてパラオに残る事になったそうです。藤さんが派遣された当時はリサイクルセンターは設立されておらず、職員が藤さんとパラオ側のカウンターパートの2人だったそうです。現在は約80人の職員が関わるまでに成長したと嬉しそうに話してくれたのが印象的でした。

当時、リサイクルセンターでは、家庭や観光施設で出る生ゴミや紙類などのゴミを活用してコンポスト製造に取り組んだり、飲み終わったペットボトルや空き缶をセンターに持参すると、販売時に上乗せされていた金額が戻ってくるというシステムで住民自らがリサイクルに積極的に取り組むきっかけづくりになった飲料容器回収プログラム（CDL）もスタートするなど、大洋州リサイクル活動の中でも大成功を収めたそうです。そして、リサイクルセンターは徐々に「持続可能な資源循環型社会の構築」の方向性とコンセプトに向けて進み始め、「廃プラスチック油化発電」によるエネルギーを手にする事により、循環型自立産業に取り組んだということでした。

同施設内にあるガラス工房では、島で排出される廃ビン为原料とし、ペットボトル等の廃プラスチックを溶かして作った再生油を燃料とした発電により溶解炉を稼働することでガラス工芸品を生み出しています。それらの、ガラス工芸品は、魚やクラゲの形の置物やカラフルなピアスなどに生まれ変わり、「Made in Palau」のお土産として販売されているとのことで、私達も体験させてもらいました。スタッフの中には、一旦海外の大学に行きガラスについて学び、またパラオに戻り働いている人もいました。そのことを嬉しそうに話す藤さん。「この取り組みがパラオの発展に繋がってほしい」と日本から遠く離れたパラオで活躍している藤さんを見て、仕事を通じた自分の使命とは。。という事を考えさせられた研修でした。（所感：小橋川）



DAY5 7月27日（土）

○ペリリュー島

持久戦が求められたペリリュー島の戦いは日本兵の自決が認められていませんでした。アメリカとの軍事力の差を感じながら、終わりの見えない戦いを続ける日々がいかに過酷だったのか、当時の日本兵のことを思うと胸が詰まりました。

ペリリュー島では戦時中に使用されていた戦車や爆弾がそのまま展示されています。戦争の遺物をむき出しにすることで当時の様子を私たちに感じて貰うためです。所々錆びている戦車に80年の月日の長さを実感しました。ペリリュー島が戦地になったのは、当時「東洋一」と評された飛行場があったからです。現在、その飛行場は台湾有事に備えて米軍が再整備しています。私は、パラオの平和が再び脅かされるのではないかと不安になると同時に、米軍基地を有し、宮古・八重山に自衛隊を配備している沖縄のことを思い出しました。平和教育では、過去に起こった出来事に焦点を当てることが多いが、平和を維持することの難しさに着目することも重要だと感じました。

私は日本の委任統治が無ければ、パラオが戦争に巻き込まれることはなかったという罪悪感があり、何故パラオに親日家が多いのか疑問でした。戦跡ガイドの平野雅人さんによると、委任統治時代に多くの日本人がパラオに移住し、教育や病院など生活の軸を作ったことが影響しているそうです。国家間が友好関係を築く上で、人との交流がいかに大切なのかを改めて感じる事が出来ました。（所感：平田）



○ホームビジット

3つのグループに分かれてホームビジットを行いました。私たちを受け入れていただいた夫婦は旦那様がパラオ人、奥様がフィリピン人の家庭でどちらも教師のお仕事をしています。当日は、お母様の誕生日ということでスペシャルランチを振る舞っていただきました。オープンで3時間半も焼いたフィリピンの伝統料理である豚の顔を頂くことができ、とても美味しく貴重な体験になりました。調理工程を見させていただくと、ラップは使用せず、生ゴミは裏の畑の肥やしにしており、環境に優しい暮らしをしていることが伺えました。ランチを頂いた後は、お二人の勤務するパラオ高校を案内していただきました。お二人とも教育熱心な先生で、自分の担当する教科だけではなくクラブ活動やその他の課外活動にも積極的に取り組んでおり、自己研鑽のためにオンラインで大学院の授業も受講していると知り、驚きました。仕事の中でやりがいを感じていることや家庭の問題に介入することの難しさなどを共有し合い、有意義な時間となりました。パラオ高校では7つのコースが選択でき、数年前までは観光科が人気だったが、現在はビジネス科や農業科を選択する生徒が多くなってきているそうです。観光のみに依存しない新しい産業を模索し、自分の力で将来を切り拓いていこうとする若者の姿が目に見え、パラオの未来に明るい希望を感じました。(所感：當銘)



○JICA海外協力隊との懇談会

パラオで様々な分野で活躍されているJICA海外協力隊員の方たちと、日本と米軍が戦った戦跡が当時のまま残されているペリリュー島の視察を通して感じたこと、各都道府県の取り組み、これからの平和教育のあり方について意見交換を行いました。日本と米国の戦いだったのにも関わらず、今もなおパラオが戦跡をそのままの状態に残してくれている意味を考えたり、米軍が飛行場を整備している現場をみて、沖縄の米軍基地問題と比べたりしました。話を通して私達はもっと戦争について様々な視点から学ばなければならないと感じました。各都道府県の学校では、修学旅行で戦争に関連している地を訪れたり、講師を招いて平和講演会を行ったり等、各県それぞれの取り組みをしていることがわかりました。しかし、最近は教育現場において、あまり過激な写真を見せなくなったり、平和教育がマンネリ化していたり等、戦争経験者も減っていく中でどのようにして繋いでいくか、考えなければなりません。同じアプローチをしても全ての子ども達に響かせることは難しいかもしれませんが、伝え方の切り口はたくさんあります。平和な世の中を持続するためには、平和教育のあり方を考えながら、継続してどんな形であれ続けていかなければならないと感じました。(所感：島津)



○協力隊ジョブシャドウ

私たちが授業を実践したベラウ・モデグゲイ高校は、バベルダオブ島にある唯一の、全寮制の私立高校です。都市部のコロールから車で40分ほどの長閑な集落にある学校で、図書室や理科室、PC室など、規模は小さいものの日本の学校にもある施設がありました。ですが、教室には、蛍光灯がありませんでした。沖縄のような蒸し暑さはありませんが、室内に扇風機は1つで、授業をしていると汗が止まらなかったです。

この学校では、教科書は高価なもののなので、持ち帰ることはせず、教室に置き、1年間の使用後、次の学年に引き継いでいました。JICA海外協力隊の三浦さんは、理科教師で、ここでは英語で理科を教えています。全寮制であるため建物は別であるものの、生徒たちと同じ敷地内で生活しているので、大変なことはたくさんあるけど、周りの人たちが良くしてくれたり、気を使ってくれているのを感じている、と話していました。

言葉や文化の違い、日本とは全く違う環境の中で子どもたちのために一生懸命努力している三浦さんから私たちが学ぶべきことは多いと思いました。また、現地の子どもたちに沖縄を紹介した時、真剣なまなざしで話を聴いている生徒たちの様子を見て「学びたい、知りたい。」と感じる子どもたちの姿はどこに行っても変わらないのだと感じました。(所感：仲松)



○在パラオ日本国大使館

在パラオ日本国大使館を訪問し、小野俊輔参事官と面会の機会を得て、日本とパラオの関係を含む様々な話題について意見交換を行うことができました。小野参事官からは、「日本の委任統治下にあった時代や、アメリカと日本が戦場にした過去を持っているパラオだが、国民はそれを決して恨んでいるわけではない。しかしせめてその過去を日本人は認識するべきではないか。パラオ人はのんびりした大らかな性格という印象を受けるが、実は海外では大洋州の人々の働きは評価されており、その土地で得た収入を母国(家族)に送金することによって経済が成り立っている。そのため、国をよくしたいと思う若者程、海外へいってしまう現状がある。他国から様々な援助を受けており国のあちこちにODAの看板等が設置されているが、国民はこれを「援助」とは捉えていない。こちら側が与えるだけではなくて現地の人もアイディアを出してもらって一緒に国の発展のために考えていきたい。」とのお話がありました。研修やパラオ滞在を通して、互いに感じたことを伝え、小野参事官と話をすることでさらに学びを深めることができました。私達がパラオ国のことを伝える時には、「パラオは援助を受けている国」とだけ伝えてしまうと、マイナスなイメージを与えてしまうことを知り、パラオで学んだ知識と歴史や文化等それぞれの背景をしっかりと理解した上で、正しい情報を多くの人に伝えることが大事だと感じました。(所感：島津)



○パラオ国際サンゴ礁センター

「パラオ国際サンゴ礁センター」（以下PICRC）では、パラオ気候変動への強靱性強化のための統合的沿岸生態系管理能力向上プロジェクトの業務調整や広報・教育・普及啓発（CEPA）を行っている専門家の板垣佳那子さん、木村匡さん、キャリーさんからPICRCの概要や活動内容についての講話をしていただきました。PICRCでは「人々を支え、世界に刺激を与える、強化された海洋管理」というビジョンのもと、パラオの海洋資源の管理を支援する為の高品質で影響力のある研究、教育、機会を生み出すセンターになることを目的としているそうです。

活動内容としては、長期にわたるサンゴ礁のモニタリングプログラムの実施や漁業支援、海洋酸性化への対応など現地関係者と取り組んでいるとのことでした。また、パラオ国内の学校や教職員向けにパラオ水族館と連携し教育プログラムを実施しているそうです。このプログラムは教育省の科学カリキュラムに準拠しており、地域の研究、生き物とのふれあい、海洋保護に関するレッスンを行っています。

講話後、実際に水族館も案内してもらいました。スタッフのダンさんからパラオにおけるマングローブやサンゴの役割、海がもたらす恵みや伝統的な漁の紹介がありました。同じく海洋資源に恵まれている沖縄県にも通じるものがあり、海を通して世界との繋がりを改めて感じることができました。

（所感：小橋川）

○ニワール州エコツアー

ニワール州政府とPICRCのJICAプロジェクトが協定を結んで共同開発中のエコツアーにモニタリングとして参加しました。今回はボートでマングローブ林の奥まで進み、往復1時間程度のトレッキングを体験しました。

森に着くまでの間は自生している様々な種類のマングローブを目にすることができました。私が住む竹富町・西表島にもマングローブが多く自生しているため、それぞれの特徴を比較することができました。トレッキングコース内には様々なパラオ固有の木々が生息しており、パラオ名・英語名・学名で書かれた樹種名のネームプレートをかけているので、ガイドさん（州のレンジャー）がそれぞれの木の名前の由来や、生態について説明してくれるそうです。今回は、ガイドさんのデビューツアーということで、和やかに談笑しながらトレッキングコースを楽しく歩きました。コースの終着地点には、綺麗な滝がありパラオの手つかずの美しい自然を感じることができました。

このツアーを企画・実施するにあたり、西表でのマングローブモニタリング研修や、現地でのツアーガイド研修を行い、現地の（ニワール州）レンジャーによるモニタリング能力向上や安全管理、カスタマーサービスを含むツアーガイドとしての能力向上にも取り組んできたそうです。今回のガイドは、ツアーが実施されているニワール州出身とのことでした。元々自分が生まれ育った場所の自然、特にマングローブのもたらす生態系サービスや保全の重要性に関する知識を深めていくことで、より充実したエコツアーに成長していくのだろうと思い、自然を大切にしながら生きていく、また発展させていく姿勢がとても勉強になりました。（所感：小橋川）



○パラオ高校

パラオには5校の高校がありますが、公立高校はパラオ高校だけで、現在540人の生徒が在籍しています。

1校時は日本語を学習している3、4年生と交流しました。パラオ語には日本語由来の単語が多く残されており、クイズを通して「ダイジョウブ」「アイコデショ」が日本でも使用されている言葉と知ると生徒たちは驚いている様子でした。また、ラジオ空手や508号線のダンスを通して、沖縄の文化に触れて貰いました。

2校時は校長先生からパラオの教育について教わりました。パラオには短期大学までしかないため、生徒はグアムやハワイなど国外の大学に進学します。パラオでも4年制大学の設置を試みたが、生徒数や規定などの条件が難しく実現出来ていないそうです。そのため、大学進学後、雇用条件の良いアメリカ等でそのまま就職する若者も多く、人材の流出が課題になっています。多くの離島を抱える沖縄県でも高等学校、大学を有しない島が多く、私が宮古島で勤務した際に教育環境を充実させる難しさに直面したことを思い出しました。

また、教員不足も深刻な課題です。実際に私がジョブシャドウイングで訪れたモデグゲイ高校でも、出産してすぐに学校現場に復帰した数学の先生がいました。教員不足の原因の1つは給料の低さです。教員の待遇改善を図るため、研修に参加したら給料が上がる制度が導入されています。ホームビジットでお世話になったパラオ高校のご夫婦もオンライン研修に取り組んでいると話していましたが、休日も出勤して仕事をこなしている状況でした。パラオも日本同様、教員の働き方改革の必要性を感じました。(所感：平田)

○日本地雷撤去を支援する会(JMAS)

武洋一さんからパラオ共和国における事業についてお話していただきました。JMASは退職自衛官を中核とした認定特定非営利活動法人で、海外での地雷・不発弾の除去を主に行っています。パラオ共和国では、戦没船となった日本の輸送船に残された爆雷の外殻が劣化し、火薬が漏れ出し海洋汚染が始まっており、2012年からこれらの不発弾を海中から引き揚げ処分する活動を行っています。武さんのお話を聞いて、第二次世界大戦激戦区ということもあり、最近でも多くの爆発性戦争残存物が発見されているということに驚きました。

私の中では、爆雷等の処理と言えば海中で爆発させるイメージがありましたが、JMASでは爆雷を焼却処分しているそうです。運搬中の爆発のリスクを考えるとなぜそのように処理するのかと思いましたが、パラオは海の80%が国立海洋保護区となっており、海の環境を保全するために爆雷を引き上げ陸地での処理をおこなっているということを知りました。また、JMASでは、活動を通じて関係者に技術移転教育を行っており、現地の方と一緒に環境、住民、観光客に対して安全で豊かな社会づくりを目指す姿にとっても感動しました。

(所感：大城)



○金城文子さん（H.K. Motel）

パラオ滞在中の１０日間は、母親がパラオ人、父親がウチナーンチュという沖縄県系人の金城文子さんに大変お世話になりました。産まれも育ちもパラオである文子さんは戦争を１２歳で経験し、１０人の子育てを終えるとサイパンの大学へ通い経営学を学んだそうです。その後、日本人観光客のためにホテルやツアー等の手配を行い、７０歳の時にホテルも開業しました。文子さんは現在９３歳。経営するH.K.Motelで私たちを受け入れてくれ、部屋だけでなく食事の提供やパラオ料理のタロイモ作り体験など、たくさんのおもてなしをしてくださいました。沖縄から私たちが研修で訪れることを聞いた文子さんは「私も沖縄の血が流れているから。」との理由で受け入れてくれたと知った時は、こんなにも沖縄を大事に思ってくれていることに感動しました。

文子さんに今後はどうしたいかと聞くと、このホテルを誰かに譲って、グアムで生活したいと話していました。日本とアメリカそしてパラオと時代に翻弄される中でもアグレッシブに強く生き抜いてきた文子さん。目まぐるしく変化を求められる現代社会を生きていく中でこのアグレッシブさを見習っていきたいと思いました。最終日には「沖縄をよろしくね。」とおっしゃってくれました。この言葉を聞いて、沖縄の教育者であることに誇りを持ち、未来を担う子ども達にたくさんのことを伝えていかなければならないという使命感で胸が熱くなりました。文子さんから頂いたパワーで沖縄の子ども達と共に今後も頑張っていきたいと感じました。（所感：島津）



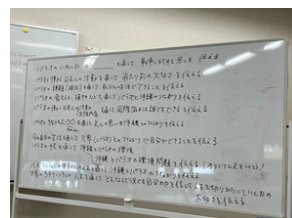
2-4 事後研修

第1回 8月5日（月） 10:00-16:00 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト	NPO法人沖縄NGOセンター 奥山有希氏
目的	①海外研修の振り返り ②ワークショップ案の作成

10日間の研修で特に印象に残った、場所、人、物などの写真を1人3枚選び、パラオ研修の振り返りを行いました。1枚1枚に全員の思い出やそれぞれの学びがあり、充実した10日間だったと改めて感じました。

チーム目標「世界をつなぐ教育の種まき～探究心をカタチに～」を軸にそれぞれのテーマと種まきの仕方を考えました。テーマや授業の進め方の大枠を決め、悩んでいることを共有し、お互いにアドバイスし合いながら形を整えていくことができました。また、校種や学年をまたいでそれぞれの教材を活用したいという発言もあり、今回の研修の学びを様々なカタチで多くの人に伝えていきたいと思いました。（所感：大城）



教育長表敬訪問・帰国報告会 8月21日（水） 10:00-11:45 @沖縄県庁

報告会では、6つの分野（文化・教育・産業・平和・自然・人々）をそれぞれで割り振り、パラオ現地で見聞きしたことや、帰国後調べたことなどを発表しました。教育長含め約20名の職員の方々の前で発表することをその場で知り、とても緊張しました。報告では、現地で学んだことだけでなく、私たちが研修を通してどんなことを考えたか、何が変わったのか、これからどうしていきたいかを含めてお話ししました。研修メンバーそれぞれの思いや考えを知り、パラオ研修の日々がよみがえるとともに、それぞれのパラオに対する思いを再確認することができました。また、当日の朝、県庁地下のカフェで事前打ち合わせするために研修メンバーと和やかに話をしたときの安堵感から、どんな状況でも前向きに、楽しく、いろいろなことを共有できる仲間との出会いに改めて感謝しました。

報告会の後、私たちは教育長室に招かれ、現地で実践した授業の内容について説明しました。私たちの話を受けて、半嶺教育長は、教育で大切なことは子どもたちの心に火を灯すこと、心を揺さぶること、教師自ら体験したことや挑戦したことの中から思いを子どもたちに伝えて欲しい、と激励してくださいました。また、変化が激しくグローバル化が進んでいるこの世界で、国際的な視野をもち、言語や風習などの違いを乗り越え、課題を解決していく子どもたちの育成の必要性についてもお話してくださいました。

私たちはそれぞれの思いをもって、この研修に取り組んでいます。私たちの経験やそこでうまれた新たな信念を子どもたちに伝え、子どもたちを導いていくのだ、と考ええると、教育が担っているもの、教師である私たちがその最前線にいるのだと考ええると、大きな使命を感じ、より一層緊張が高まりました。

（所感：仲松）



JICAフェスティバルでは、ブースを運営し、写真や掲示物を通して、パラオの紹介や研修の概要、帰国後に行ったワークショップの内容を説明しました。多くの人にパラオについて関心をもってもらえて嬉しかったです。特に、パラオ語と日本語が類似している点について「面白い!」と言っておられる来場者が多く、言葉から歴史背景について考えておられました。また、パラオでもかつて悲惨な地上戦が繰り広げられていた事実を知り、戦車がそのままの状態に残されている写真を見てとても衝撃を受けている印象でした。沖縄とパラオのつながりを感じてもらうことができ、充実感あふれる一日となりました。1月の成果報告会でも、たくさんの方にパラオと沖縄のつながりや、私たちの実践活動について知ってもらい、沖縄での開発教育の輪がさらに広がってほしいと思います。（所感：當銘）



第2回 12月14日（土） 10:00-16:00 @JICA沖縄センター

講師/ゲスト	NPO法人沖縄NGOセンター 奥山有希氏
目 的	①各所属校で実践したワークショップの成果と課題を報告しあう。 ②実践結果からワークショップをブラッシュアップする。

9月～12月の間、パラオで経験したことを軸にワークショップを作成し、授業実践を行いました。今回の研修では、教材作成や授業実践を通して、それぞれが良かったこと、工夫したこと、悩んだことなどを共有しました。教材作成では、伝えたいことが多く、取捨選択しながら1時間の授業内容にまとめることに苦戦した先生が多かったです。しかし、単発の授業で終わるのではなく、これまで学習した内容と関連づけたり、道徳やキャリア教育など他の授業と繋がりを持たせたり、工夫を凝らしている教材が多かったです。

今回、私たちのテーマである「種まき」について、児童・生徒、教職員がパラオに興味を持ち、積極的に授業に取り組んだ点で効果があったと思います。しかし、全職員がパラオの教材を活用して授業を実践する段階まで落とし込むことができませんでした。パラオの研修に参加していない教職員でも教材を有効活用できるようブラッシュアップを図る必要があると感じました。

小学校の3校では、1つの教材を異なる学年で同時に授業実践を行ったり、中学生を対象に実施した教材を小学6年生の授業でも取り入れたり、特定の児童・生徒だけではなく幅広い年齢層で教材を共有することができました。

また、私たちが作成した教材はパラオと沖縄県の繋がり、共通点を考えるものが多かったです。そこでパラオを通して児童・生徒が沖縄県の魅力や課題に気づき、今後の沖縄県のビジョンを想定する教材や児童・生徒の将来像を見据えた教材になるよう、今後も改善を図っていききたいと思います。

（所感：平田）



ハイブリット形式で成果報告会を行いました。初めにアイスブレイクとして Kahoot! でパラオに関するクイズを行いました。ゲーム感覚で楽しみながらパラオの基礎知識を学ぶことができ、報告会へと移ることができました。

成果報告では、「文化」「教育」「産業」「平和」「自然」「人々」に分け、気づきや学びを発表し、最後に帰国後の授業実践について報告しました。参加者のみなさんもパラオに関して初めて知ることや私たちの活動内容を興味を持って聞いている様子でした。

報告後には、作成したワークショップ教材を実践しました。「パラオがもし100人の村だったら」という内容で、パラオ国内の現状と課題に気づくことができるワークショップとなっていました。実際、参加者はワークショップの中で驚きや気づき、疑問をお互いに共有していました。

今回の報告会で、作った教材を多くの方に見て頂き、改めて一度きりで終わらせず、ブラッシュアップを続けていきたいと思いました。

（所感：大城）



2-5 研修を終えて

大学生の時、カンボジアへの教育支援のボランティアに参加し、海外の教育に興味を持つようになりました。教員となった現在も「海外の子どもたちに私ができることは何か」と考え続けています。経年研がない今年は自ら動いて学ぶという目標を立てていたため、JICAの教師海外研修に参加しました。

パラオでの研修は、帰国して周りからの「研修どうだった？」に、一言では返すことができないほどの、経験、学び、思い、考えた、濃い10日間でした。様々な企業団体から話を聞き、驚きやモヤモヤが解消されることがないまま、一日が終わっていく日々でした。しかし、話を聞けば聞くほど学びも疑問も点と点のようにつながり、毎晩パラオの事を仲間と語り合っていました。とても貴重な体験をすることができました。

帰国後、子どもたちや先生たちに早く伝えたい思いでいっぱいな半面、何をどこからどのように伝えるべきか悩みました。しかし、そんな時こそ、熱く語り決めた私たちのテーマ「種まき」という言葉を思い出し、教材を作りました。そして、導入編では子どもたちにはパラオと沖縄のつながりだけでなく、他校ともつながる教材を実施することができました。そこから、子どもたちの実態に合わせてパラオから沖縄の事を考える教材を作り上げることができました。他クラスでの実践や校内OJTなどでたくさんの人たちにパラオでの経験を伝えることができました。ですが、ここで終わらず、さらに派生して教材を考えたり、私の思いを伝え続け、子どもたちの目を外や内に向けいろいろな価値観や視野を持ってほしいと思います。

最後に、海外研修への参加を激励してくれた職場の先生方、JICA・JOCAのスタッフの皆様、共に過ごした5人の先生方、パラオで出会ったすべての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。



大城莉子

今回の研修では、教師としての国際理解教育への知見を更に広げ、様々な年代や校種の先生方との協働的な学びを发展させることを目的として参加しました。また前々回の教師国内研修での学びや、その経験から授業で取り組んできた「多様性」というテーマを意識して研修に臨みました。

事前研修では、国際理解や開発教育の視点を持った取組への基礎を学びました。今まで自分たちが住む沖縄を中心に物事を考えていましたが、世界の国々や日本との交流を知っていくうちに、それぞれがその年代で繋がり、互いの異文化への理解が今に繋がっているんだということを感じました。約10日間の現地研修では、パラオには、おなじ島国という点やこれまでの時代背景から、沖縄や日本と似ている部分が多くあるという事が分かりました。そして抱える課題も、観光と自然の共存や健康問題、交通事情など沖縄と似通っている部分が多くありました。また、研修で訪れた先々では、現地で活動する日本のNGOやJICA草の根事業の皆さん、JICA海外協力隊の方々交流することが出来ました。その中で、日本や世界との繋がりも含めて今のパラオをより良くしていこうとする情熱を感じることが出来ました。交流の中である方が「例え、日本や海外、場所がどこだろうと『自分が出来ることをやるだけ。』」と話してくれたことが私の胸に響きました。私達教員が携わっている教育も、場所に限らず普遍的なものだと現地での学びを通して改めて実感しました。

事前から現地、事後の研修の中で、参加した皆それぞれがいる場所は違えど、同じベクトルで活動し互いを高めあっていく日々がとても心地よく、教師としてのモチベーション向上にも繋がりました。そして、教材作りから授業実践を通して、子どもたちに還元できたこと嬉しく思います。今回で学びを止めるのではなく、さらに子どもたちの国際理解への扉をひらくキッカケになれるように、私自身も学び続けていきたいと思っています。

最後に、研修を実施してくださいましたJICA・JOCAスタッフの皆さん、JICA/パラオ事務所、JICA海外協力隊の皆さん、金城文子さん、研修をと共に過ごした仲間達、出逢えた全てのの人に感謝します。Mesulang!



小橋川利奈

私は昨年度(2023年度)、校務分掌で外国語担当をしたことをきっかけに外国に興味を持ち始めました。年度末の掃除中に本研修の募集要項を見つけた時は、『これだ!』と心が震えたのを覚えています。自分自身の挑戦だけでなく、挑戦する姿や学び続ける姿を子どもたちに見せたいという想いから本研修の参加を希望しました。

パラオ研修では、国際協力活動の視察や学校訪問等を行う中でたくさんの気づきと学びを得ることができました。一番印象に残っているのは、小学校や高校で授業を行ったことです。教育者として、海外の学校の様子を知れたことが、子どもたちとの触れ合いができたことはとても貴重な経験となりました。私の英語で伝わるのかと不安でしたが、子どもたちが一生懸命話を聞いてくれたり、楽しんで活動してくれたりする姿はとても嬉しかったです。またパラオでは、現地で活躍しているJICA海外協力隊、滞在中お世話になった沖縄県系人の金城文子さん含め、現地に住んでいるパラオ人など、たくさんの人との出会いがありました。関わりを通して、自分にはない視点や考え方を知ることができたと共に、人の優しさや温かさを感じることができました。国境を越えても、お互いが相手を受け入れ笑顔で話せることや自分の思いを伝えられることはとても素敵なことだと感じました。パラオの社会発展のために熱意を持ち、試行錯誤をしながら活動をしている日本人の姿をみて感動したり、平和について考えると悲しい気持ちややるせない気持ちになったり、学んだことを仲間と共有しながら、この学びをどんな授業にしようかとワクワクしたりと、色々な感情になりました。本当に私にとってパラオで過ごした10日間は毎日が刺激的でワクワクが止まりませんでした。

沖縄に戻り、パラオで学び感じてきたことをどのように子どもたちに伝えようか何度も案を練り直しながらワークショップを作成していきまし。子どもたちは私の話に前のめりになりながら興味深々に聞いていました。その姿を見て、改めて本研修に参加してよかったなと実感しました。

行動にうつすタイミングは人それぞれだと思います。しかし、まずは「知る、ことがないとそもそも行動にうつすことはできません。研修テーマである『教育の種まき』にもあるように、私の本研修での学びを通して、少しでも多くの人たちが世界に目を向けるきっかけに繋がってくれたらいいなと思っています。そして、私がまいた種がいずれどこかで花を咲かせてくれたら幸いです。ことだと思っています。本研修に挑戦してよかったと心の底から思います。今後も子どもたちの先頭に立ち、様々なことに挑戦し、学び続けます。

最後に本研修に携ってくださった全ての方々へ感謝を申し上げます。この出会いは私にとって宝物です。本当にありがとうございました。



島津佑実

以前より国際理解教育に関心があり、今年度勇気を振り絞って挑戦した教師海外研修。この決断は私の教師人生において最高の選択となりました。

事前研修では、開発教育ワークショップを体験したり、沖縄とパラオの繋がりを学ぶことができ、パラオを訪れる前から新しい発見や学びの連続で有意義な時間を過ごすことができました。そして、いよいよパラオへ出発。滞在中には、現地小学校での授業実践、ホームビジットなど貴重な体験をすることができました。どの訪問先の方々も真摯にお話をしてくれて、熱い情熱を持ってパラオで活動されている姿に強く感銘を受けました。また、パラオを通して平和教育や環境問題等、様々な課題について深く考えることができました。そして、たくさんの愛情で私たちを温かくもてなしてくれた民宿オーナーの金城文子さんのおかげで何倍にも充実した研修となりました。

英語教師ではあるものの、海外経験の少ない私にとって、現地の方々と英語で意見交換をしたり、通訳をする機会があったことは、大きな自信と今後のさらなるモチベーションになりました。改めて英語で広がる可能性について生徒たちに伝えていきたいと強く思いました。同時に、日本語の影響が色濃く残っているパラオ語を通して、世界には様々な言語があり、政治的・歴史的背景やアイデンティティの形成等様々な要素が関係して成り立っていることや、自分のコミュニティの言語や文化を次世代へ繋いでいくことの大切さも伝えていきたいと感じました。

帰国後、パラオで学んだことをもとに考案したワークショップ実践では、生徒たちがキラキラした目で参加してくれた姿が目に残っています。これからも探究心を大切に、沖縄の子供たちへ新しい学びの種まきをしていきたいです。最後に、研修を支えてくださったJICA・JOCAのスタッフの皆様、共に参加した先生方、研修で出会ったすべての方々に感謝します。ありがとうございました！

常盤 里香



私は、「教師としての経験値を上げたい」「人とのつながりを広げたい」という思いから、教師海外研修に挑戦しました。自分の授業に新しい要素を取り入れたい、自分の経験を増やして視野を広げ、子どもたちに還元したいと考えたからです。また、約半年間の研修を通じて、多くの人と出会い、つながることで、様々な自分に出会い学び続けたいと思ったからです。

しかし、10日間のパラオ研修では、お湯が出ない、必要だと思ったものがすぐに手に入らないなどの不便さに戸惑いました。2日目には「本当にここで10日間過ごせるのだろうか。」と不安になり、たかがこれくらいのことで戸惑っている自分にショックを受けました。そんな中でも、私が最も感銘を受けたのは、パラオの健康課題に取り組む安間さんや、ペリリュー島で戦跡ガイドを務めている平野さん、ゴミ問題に取り組む丸山さんたちとの出会いでした。他にも多くの方がこの国の課題を改善しようと努めていました。途上国で使命感と誇りをもって活動している日本人の姿に私は、一つ一つの活動を子どもたちに伝えたいと思いました。実践したワークショップでは子どもたちが、自分の好きなことについて考えたり、自分が海外で活動することについて考える姿が見られました。

パラオでの、一つ一つの研修を終えた後の振り返りが大好きな時間でした。パラオで同じものを見て、聞いて、考えたことや感じたことを、それぞれがいろいろな視点をもって、話し合うことができました。

いろいろな考え方に会えたことにとってもワクワクしました。ここで得られたみなさんとのつながりは、私の人生の中で大切にしていきたいものの一つになりました。パラオで出会ったみなさんの笑顔も昨日のこのように思い出されます。このような大変貴重で、二度と経験できないような研修を最後まで受けることができたのも、研修でお会いした皆さん、サポートして下さったJICA沖縄、パラオ事務所、JOCAの皆様のおかげです。そして、私たちをいつも見守ってくれた金城文子さん、本当に感謝しています。ありがとうございました。

仲松 友美



私が教師海外研修の存在を知ったのは、3年前に参加した教師国内研修がきっかけです。当初予定していた広島県での研修は、新型コロナウイルス感染拡大の影響でオンラインに切り替わり、実際に現地の人と触れあい、現地の空気を感ずることができなかったことが心残りになっていました。私にとって今回のパラオ研修はそのリベンジの場でもありました。

パラオで過ごした10日間は私に多くの気づきと戸惑いを与えてくれました。各国からの支援の証として提示されている国旗のマークを見て、私は当初「日本の支援が様々な場所でいかされている」と誇らしく思っていました。しかし日がたつにつれ、町中に溢れる日の丸に複雑な思いを抱くようになりました。それは私たちの支援がパラオ人の成長を狭めているのではないかと考えるようになったからです。私はパラオに出発するまで「途上国の目標は支援からの卒業」だと捉えていました。しかし、研修の中でパラオが「支援慣れ」している現状を知り、私の考える支援の理想像とパラオ人が望む支援のあり方にズレがあることに気づきました。

帰国後、パラオでの体験をどう授業に還元していくか、試行錯誤の日々でした。私たちの研修テーマのサブタイトルが「探究心をカタチにする」なので、教材では正解のない問いを設定し、生徒一人ひとりが自分なりの答えを探す形にしたいと考えました。伝えたい思いが多く、教材に取り入れる内容を取捨選択することに苦戦しましたが、それ以上に教材を作る楽しさや充実感を得ることが出来ました。

パラオでの研修で一番私が緊張したのが英語です。英語で高校生に授業することやホームビジットで一般家庭のお世話になることなど出発前は不安で押しつぶされそうでした。しかし、一緒に研修に参加した仲間やJICAスタッフの皆さん、各研修先で通訳して下さった多くの方々のおかげで、有意義な時間を過ごすことができました。

最後に、6月から始まったこの研修を支えて下さった皆様と出会えたことは私の宝物です。本当にありがとうございました。

平田 真弓

